

文 化

黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む「剪画」。「切り絵」ではなく「剪画」と呼ぶのはカッターナイフで絵を描いているという思いからだ。私はこのシンプルな技法を使って、故郷の神戸を描き続けている。

ひと目で弟子入り志願 1980年代後半、私は関東の大学を卒業し就職していたが、日本剪画協会の石田良介会長の作品を見たのが人生の転機となった。そして95

となった。東京・銀座の画廊に並んだ連作の、空気が水音まで伝わってきた。紙を切ってこまごま表現できるなんて！

石田先生の指導の下、基礎を学んだ。自分のテーマを何にしようかと考えた時、神戸の風見鶏の館が頭に浮かんだ。もと

年1月17日、阪神大震災のあの日。関西で地震と聞き、急いでテレビを付けた。「神戸、聞こえませか……」

「しっかり描いてな」 自分にできることは何か。制作すること。ならばこのまちに起きたことを描くしかない。

1年間実家と関東を往来しながら、1000枚以上の写真を撮影。自分にとってなじみ深い場所を題材に、1年かけて制作した作品と文章を97年、詩文集「神戸・あの日より」として出版した。

学芸員がリレートーク 震災から20年を迎えた今年1月、阪神間のミュージアム9館で震災を語り継ぐための「リレートーク」を始めた。

さてそろそろ神戸の風景画も再開しよう。復興を遂げた神戸で、今度は歴史ある建物が失われようとしているからだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

「剪画」の技法は、黒い和紙にカッターナイフで風景や肖像を刻む。石田先生の指導の下、基礎を学んだ。

1.17から刻む故郷絵

◆震災、復興、神戸の人々 カッター使い「剪画」で記録◆

とみさわ かよの



「商店街」(神戸・あの日より)から

倒れたブロック塀の破片すら私には持ち上げられない。自分の無力さにごん底まで落ち込んだ。そんな折、近所の家は「なんぼでも汲んで行って」と自宅の井戸を開放した。祖父や父が通った理髪店は激しく傾いた店の前で、水を使わないドラ

はつらかった。路地で「カメラマンか」と問われ、叱られることを覚悟しつつ「絵描きです」と答えると「しっかり描いてな」と言われた。「なぜあの日、ここにいなかったのか」と自分を責め続けた私は、神戸の人たちにごんほど励まされたことだらう。

1年間実家と関東を往来しながら、1000枚以上の写真を撮影。自分にとってなじみ深い場所を題材に、1年かけて制作した作品と文章を97年、詩文集「神戸・あの日より」として出版した。息子を亡くした女性からは「震災の写真は今も見られないけど、あなたの絵は見られる」と綴った手紙が届いた。

出版と同時に帰郷した私は、復興していくまちを追いつけた。ピルの工事現場や、取り残されたアーケード。5年前からはタウン誌で「神戸鉄人伝」の連載を開始した。文化人を訪ねてお話を伺い、似顔絵とともに紹介している。地元紙の明石版では大漁旗の染め職人や玉子焼き屋さんの肖像シリーズも手掛ける。

ささやかな連載だが年月が経てば、この場所、この時代に生きた人々の記録になるのではないかと。神戸市の臨時職員などを経て、現在は明石市立文化博物館に勤務している。文化財や作品を守り、歴史を後世に伝える学芸員の仕事は、震災を記録してきた私の制作と通ずるものがある。



(剪画作家)